

Title	現代日本語における「サポート」の用法
Sub Title	
Author	Vu Thi, Thu Thao
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2020
Jtitle	日本語と日本語教育 No.48 (2020. 3) ,p.109- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20200300-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔大学院文学研究科修士論文〕

現代日本語における「サポート」の用法

ヴ・ティ・トゥ・タオ (VU THI THU THAO)

現在、外来語は幅広い分野に浸透しており、様々な場面で目にしたり耳にしたりする。その中で、日本語では基本語となったものも多い。主な研究としては、金愛蘭 (2006、2015)、宮田公治・田中牧郎 (2005)、宮田公治 (2007) らによる、「トラブル」、「クレーム」、「リスク」、「メリット」などの考察がある。これらは外来語であるが、日常生活の中で頻繁に使用され、他の和語や漢語に言い換えしなくてもそのまま意味が理解されている単語である。本稿では、こうした基本的な外来語の意味に着目し、「サポート」という語を対象として分析してみた。また、「サポート」の類義関係を持つ外来語の「ケア」、関連する「アフターサービス」、漢語の「修理」、などとの相違についても考えてみた。

まず、数点の小型国語辞書・外来語辞書の版の違いによる記述の相違を検証し、見出し語として立てられる時期や語釈の違いを調査した。その結果、国語辞典に「サポート」が現れるのは意外に遅く、最も早く記載されたのは『新明解国語辞典第4版』で1989年に出版されたものであった。外来語辞典では既に『コンサイス外来語辞典 初版』(1972)に記述があった。

また、文学作品として『新潮文庫の100冊』を使用し調査したが、ほとんど例を見ることができなかった。読売新聞オンラインデータベースである『ヨミダス歴史館』を使用して新聞記事から用例を探ると、「宋子文氏は外国銀行に銀輸出見合わせの**モーラル・サポート**を懇請しつつあるが」(読売 1935.04.14 東京朝刊)のような例が早いことがわかったが、現代語とはかなり用法が異なっていた。

次に、BCCWJを用い、現代日本語における「サポート」の使用傾向と用法を分析すると、「IT・技術・その関連サービス」、「経済・金融」、「医療・福祉」という3つの分野に偏って使われているという傾向が明らかになった。これらは、類義関係を持つ「ケア」、「修理」、「アフターサービス」も視野に入れなければならないことがわかった。たとえば、「医療・福祉」の分野において、「サポート」と「ケア」を比較すると、「ケア」は身体的にも精神的にも用いられ、傷ついたり、弱ったりした人また体の部分に手当てをする必要な場合に使用する。が、「サポート」は支援、援助の意だけでなく、人に使う場合には「ケア」と異なり、現状維持、またはよりよい状態にすることを意味することがわかった。また、「修理」は眼鏡、時計、車、のような単純な仕組みのものを併用するが、「サポート」は構造が複雑なパソコン、またスマートフォンのようなパソコンを基盤として動くシステム、ネットワークと一緒に使用される傾向がある。「アフターサービス」は商品に関わるサービスの全般を提供すること指す語である。現代において、複雑化した多様な対象に働きかけるには、「修理」より「サポート」のほうが表す意味の範囲が広いいため、多く用いられやすいのではないか、という使用意識についても指摘した。